「楽器産業文化学」構築の試み

小岩　信治
文化政策学部芸術文化学科

楽器産業によって長らく世界に知られ、「音楽の都」を目指す浜松市に立地している静岡文化芸術大学は、文化や産業に関する学際的な研究領域を射程に収める文化政策学部を擁しており、浜松というユニークな都市の文化史を楽器産業を軸に探究する使命も負っていると言えよう。こうした研究（それを仮に「楽器産業文化学」と呼ぶ）は、本学入学者が学ぶべき「浜松学」「静岡学」の一部を構成するはずであるし、それは地域の人びとの「シビック・プライド」の醸成に繋がることにもなろう。筆者は本学の奥中康人、根本敏行、羽田隆志とともに、二〇一二（平成二四）年度学長特別研究を本論のタイトルで行っている。その成果は来たる二〇一三（平成二五）年度研究紀要で報告することになるが、本稿はその一部に関する中間報告である。

静岡文化芸術大学が、「音楽の都」を目指す地域文化の特性を活かしてアカデミックな探求を展開すべき一つのテーマとして、仮に「楽器産業文化学」と呼べる領域があるのではないか。筆者は二〇〇四年に本学に着任して以来、音楽学者としてこの地のニーズにあった研究・教育活動を模索してきた。その間、おぼろげに姿を現したように感じられるのが、本学が拠点となるこのような研究領域の可能性、アカデミックな「未開の地」の存在である。

音楽学の研究のなかには楽器学という領域がある。それは伝統的に体系的音楽学、つまりシステマティックなことを扱う音楽学とされてきた。これに対する概念は歴史的音楽学であり、音楽史研究がここに含まれる。楽器学に含まれる「オーソドックスな」諸研究は、確かに一面で時代を超えて有効なシステム、例えば楽器分類法の確立に貢献してきた。しかし楽器も時の変遷、文化の変容の波にさらされているのであって、楽器の研究が時間軸を無視／軽視したまま十全に社会の期待に応えられるわけではない。例えば楽器の文化史について論じるべきことは多い。

音楽史研究の方では長らく、とくに西洋音楽史の研究において楽譜を主たる考察対象とすることが多く、楽器の考察は後手に回っていた。楽器のことは体系的音楽学に「任せて」、楽器に関係なく楽譜上に示される「音楽作品」に注目が集まる、という、いわば住み分けが機能していたとも言える。しかしながらそのような状況は過去のものになりつつある。楽器というテクノロジーが音楽史をどのように決定づけてきたのか。それを考察せずに音楽史記述は不可能、と考えられるようになった。

音楽研究を離れれば、産業と文化に関する社会科学領域がある。文化を創出するファクターとして産業を捉え、産業文化を研究対象化することは近年珍しくない。しかしながらそこで楽器産業を明確に射程に入れることは、個々の研究者のレヴェルでは行われているものの、その連携・組織化は少なくとも国内では未だ充分に行われていない。

このような状況において、文化政策学部を擁し、つまり文化と政策に関する教育・研究機関である静岡文化芸術大学が、文字通り世界に向けて生産されている浜松地域の楽器を軸に、特色ある文化研究を推進し、その成果を発信するとともに、関係する企業、産業遺産、そしてそれらの研究者を連携させる拠点になることができれば、浜松に立地する本学の特色ある研究・教育分野として世界にアピールできるであろう。むしろ、そのような研究領域を開拓できるのが、世界を見渡したときにハママツではないか。そしてそれは、一つの文化研究領域であるとともに、「いま、ここにある」研究対象に学生の関心をひきつける地域学としても機能するのではないか。このような考えに基づき、筆者は本学の奥中康人、根本敏行、羽田隆志とともに、二〇一二（平成二四）年度学長特別研究を行っている。その成果は来たる二〇一三（平成二五）年度研究紀要で報告することになるが、本稿はその一部に関する中間報告である。

学長特別研究「楽器産業文化学の構築の試み」は、この領域が超域的・複合的でかつ研究手法が確立されていないことに鑑み、まずは、この領域を将来学ぶ学生にとって教科書となり得るのはどのような内容かを検討することとしている。具体的な方法として、楽器産業文化を支えてきた人材へのインタビュー調査、そして小規模な楽器（の一部）の制作である。この領域の魅力を学生にわかりやすく示そうとすることを重視しているのは、現在本学で進行中のカリキュラム改訂に合わせてこのテーマの新しい授業を構成することを視野に入れているからである。本稿では主に、前者のインタビュー調査の例を挙げる。

ケース一　証言者としての楽器開発者

六月二六日、本学一二階教員交流室にお迎えしたのは日吉昭夫（ひよしてるお）ヤマハ元代表取締役専務である。日吉氏は電子オルガン「エレクトーン」開発の初期に関わられ、現在その時期のありようについて直接お伺いできる貴重な存在である。氏の講演とその質疑については改めて報告することにして、本稿ではインタビューの印象を簡単にまとめる。

八〇歳を越えて矍鑠としておられる日吉氏は、ヤマハが当時、「エレクトーンという新しい音」を作る意気込みであったことを熱く語られた。エレクトーンが現在、さまざまなアコースティック楽器を模倣する楽器として高い評価を得ていることからすると、同じ会社、同じ商標の商品が、現在とは違うコンセプトで生み出されていたことが浮き彫りになったと言える。社内の商品開発の方針の転換の経緯など、場合によってデリケートな問題を含むこうした問題は、当該企業と連携しながらも、第三者の視点での記述を試みるべきさまざまな内容があることを感じさせた。

「楽器産業文化学」にとって、重要な時期に立ち会った開発者や技術者に、それぞれが所属する企業の社史等とは違うスタンスで取材し、この領域で研究するための一次資料をインタビューの形で残すことが重要である。今後、日吉氏同様ハママツの楽器開発の重要な時期を担われた方に、インタビューを試みる。

ケース二　現代の楽器開発者

続いてお招きしたのは、ウダー制作者・ウダリストの宇田道信氏である（九月一一日）。宇田氏は現在三一歳。氏の名前を冠した「ウダー」という電子楽器を開発された。楽器の開発に今この瞬間に携わっている方である。

独特の形状をしたウダーは、ピアノをはじめとする多くの鍵盤楽器の欠点を克服する興味深い楽器である。ピアノの場合、一旦発音した音は減衰する一方で、「歌う」ことが苦手である。また一オクターヴを構成する十二音以外の音、例えば四分音が出せない。けれどもウダーは、楽器に巻かれたロープの特定の音高の位置を押すことによって、ピアノで出すことのできない音高を演奏でき、また押し続ける強さを変えれば当該の音を次第に強くすることもできる。宇田氏が持参されたウダーを実際に演奏してみて、多くの鍵盤楽器にある左右に広い鍵盤が存在せず、しかし手のひらに収まるスペースで多様な音を自在に生み出すことができるウダーに、高い評価がされるべきだと考えるに至った。

現在、楽器開発を専門にされている方は決して多くなく、また宇田氏のように新楽器の開発に成功された方はさらに少ない。しかし、こうした方へのインタビュー調査は、現在のこの分野のありよう、最新の知見を明らかにするとともに、楽器開発者が古今東西で取り組む共通の問題を明らかにする可能性もあろう。

なお、現代では「楽器」が必ずしも有形ではないことを付記しておかなければならない。ヤマハのヒット商品ボーカロイドは、開発者剣持秀紀氏にとって「楽器」である（二〇一一年日本アートマネジメント学会大会での発言）。このような楽器開発者の活動拠点が浜松であることも、注目に値する。

ケース三　スタンダード化された現代楽器の歴史研究

学長特別研究では想定していなかったものの、文化・芸術研究センターでは、映像制作プロジェクトに参画する学生に浜松ケーブルテレビから一五分番組の制作依頼があり、音楽文化に興味を持つ学生が中心となって、鈴木楽器製作所の鍵盤ハーモニカ「メロディオン」を紹介する番組が作られた。昨年五〇周年を迎えたメロディオンは、全国の学校教育の場に定着して久しいメイド・イン・ハママツの楽器である。番組では、このような楽器が生まれた歴史的経緯と、現在の工場の様子、そしてメロディオンが活用されている教育現場の映像が紹介された。じつは鈴木楽器でもこのような記録映像の制作は十分には行われておらず、制作された番組は鈴木楽器社内でも活用されるとのことである。

こうした試みが明らかにしたのはまず、現在よく知られている楽器であっても、その開発史・製造史に関して記録を残す必要があること（今回の取材によって、わずかに残っている社内資料について再確認することになった）である。また学生の参画という観点でみれば、地域文化に興味を持つ学生が、将来歴史研究に活用されうる資料の制作に携わることができるため、教育・研究のリンケージという観点からたいへん重要である。

なお文化・芸術研究センターでは現在、ピアノ産業史の調査を実施しており、そのようなタイミングで本年、大橋ピアノ大橋幡岩氏の残した資料を浜松市博物館が収蔵することになった。それは現在のところ、大量の未整理資料である。ピアノという広く知られている楽器についても歴史研究の課題が存在し、浜松というより日本のピアノ製造史の一つの局面を解明する資料が「明るみに出されるのを待っている」という事実も、「楽器産業文化学」が必要な理由の一つである。

本年度冒頭以来の右のような活動を整理すると、「楽器産業文化学」の研究活動の可能性として、まずは次のいくつかを挙げることができる。

・楽器開発に関する現存資料の整理・管理
（楽器会社保管のもの、楽器会社ではなく個人が所蔵する／したもの）
・楽器開発の歴史的な瞬間に立ち会った方々の「証言」の記録制作
・楽器産業文化に関する入門的内容の資料制作
・関連する研究者の情報のネットワーク化

当面はこうした作業を蓄積することで、この領域における静岡文化芸術大の拠点性を高めることが求められよう。

Musical instruments and the industry as a cultural history of Hamamatsu City: A new interdisciplinary research field for SUAC

Shinji KOIWA
Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

Shizuoka University of Art and Culture is located in a city where musical instrument companies have long prospered. The city government of Hamamatsu aims at being recognized worldwide as a "capital of music". SUAC, with a Faculty of Cultural Policy and Management that makes a variety of interdisciplinary contributions including culture and industrial development, has a mission to research the cultural history of this unique city and its development concerning the production of musical instruments. Researching industrial culture for musical instruments also should constitute a part of Hamamatsu study or Shizuoka study. SUAC should contribute also to the civic pride of the region. The author of this article, along with some members of the staff at SUAC, share the opinion that there should be an interdisciplinary field in which SUAC can make use of its unique resources, and therefore profit further in this area. This can occur through the unification of musicology, industrial culturology, and design studies, for which SUAC also has Faculty of Design.